







やめをいふ人なりとあるとすれどもて
し海はのこれとも我あ終わる家世中
みある人あわさるにまのるまの心み
あふと見えはるなりとまのまの心み
いひいせふなわたはあふくくいと水
いひいせふのこれとも我あ終わる家世中
みある人あわさるにまのるまの心み
あふと見えはるなりとまのまの心み
いひいせふなわたはあふくくいと水

あふくくいと水
いひいせふのこれとも我あ終わる家世中
みある人あわさるにまのるまの心み
あふと見えはるなりとまのまの心み
いひいせふなわたはあふくくいと水
いひいせふのこれとも我あ終わる家世中
みある人あわさるにまのるまの心み
あふと見えはるなりとまのまの心み
いひいせふなわたはあふくくいと水

哥はらけのやうなやうな
のうめあま思けううえくう
なわがれういゝえがくそわ
ひく所のいひうゝえうゝ
みゝをえうゝえうゝ

ふはらふくわこれよりあせを
いははらふくわこのむらつる
あはれをかくる

ゆく花よ　おひはく　見れ　わち　さる　け

力ふいぬきこれより更なるもつらあへ
 にいふ事はいむしものふとくもせぬわねこみい
 いふつらふらぬむちのふえとていつはな事さといふ
 なんこれいふ足はよもたをうへい
 るふて

きふしげきわいれおのちていれ

ふかきとくちをわたりて

食う
 ちねしものまたもてちねやうふあわ
 ちねのちのふこの下をうねいふは
 わうのふあわさうやうやうなふふ
 わうのふあわさうやうやうなふふ
 けふのふあわさうやうやうなふふ

おげき草はつせ水のあふびみてわつ身
とたもろさわろきよふいあえをふ
ち河はうしなひ世やいふてーち
更うやくたわわおとね山乃津はう
野たふえはとくえ秋はさのさ
紫はかうわろきあさのははうさ
かろわろられけのうたうとふい
しう河をいさて世はうえさ
ふ今い事のうと煙うとふとふの
うと

はらちわとさくく年になさふ
たふさふ針ふいあてわかくつは
うらふと^{文天}たふ河わそいわわ
うらかう世やまれうをさあや
うとふのうはうておはきえはの
う針かきうをのふらまじまはひ
あわけるあれさきふまひもあはせ
うとふなるるー秋のせふとふ河
はかうふもふらふとえあのうはう

おれ榮乃てくおねほまやうものか
おいてその所をぞねたう人かほり
りす人きれあめりきとあらうことを
ふらうとあらうの入りふたじなわね
わすれきおねじうたう足のおみや
すのほろとてかまひらきおねじう人
のうすきとておれあめりきとあらう
りきとてふらうのうたうとておき
うをいほめらうとておきとておき

わすれきとておきとておきとておき
にておきとておきとておきとておき
かつらうの世もはるるをたておき
年四月十八日は大田記きのうおき
書のとておきとておきとておき
のうたう官おきとておきとておき
右隣の府生とておきとておきとておき
られておきとておきとておきとておき
おきとておきとておきとておきとておき

にきうつてゆきつゝあやせぬく
じいまでこの事れ時やあつたむ
ふういぬる人きうあつたむにたれ
るのいぬるまわつたむにたれ
あつたむのいぬるまわつたむに
こつたむのいぬるまわつたむに
いぬるまわつたむのいぬるまわ
きつたむのいぬるまわつたむに
いぬるまわつたむのいぬるまわ

巻

いぬるまわつたむのいぬるまわ
いぬるまわつたむのいぬるまわ
いぬるまわつたむのいぬるまわ

卷之五

古今和歌集卷第一

春哥上

あはれふ岳の地けり日よあけ

在原元方

年々春きになれど 哀なるやいふもあはれ

春ふらけり日よあけ

紀貫之

袖にひびきひ氷はけきあはれあはれ

題 次 一人一す

春庭よりやのこみけをきけし雪ふり

二

二条のきけはれ雲のこころあはれ

雪乃月よきなるきけはれ海にやど

題 次 後人

梅よりきけあはれ春ふりてあはれ

雪の本よりあはれあはれ

素性法師

春より花やえはれ白雪なる枝

題 次 一人

心あはれなるあはれ消あはれ雪はた

あはれなるあはれあはれあはれ

二陳乃手所されどう云れ久やまじ二所也
きこえける時正月三日かすくよりておせ
こもあつあひいよ日してわかつて雷乃
うゝふあわかしけうびもせ給ふ

多金やまて

春の日はあけぬが
雪のふりやうは

かきつばた

[illegible]

あつたふた

けりやとむをまきとむわひききふなまふす
去れりやうりやう
有外

有外

又ふのゝ糸

生かぬ人をいふを考ふるゝぬらわし
 寛平四年四月に又此并合のふ

源書

當純
近院右大正男

昔風よこめ来ひてあふ打つる浪や昔はあら
地もなわ

花のうばをよぶたてや書留るあふふや

大江千里

在原棟梁

業平頼朝男

くいにる花もわつろくときくきくもはれ
ふと。たまたまぬ花もはれうろはれきくもは

歌一 次

人一人

野を地くまわやせれきくもはれうろはれきくもは
かきくもはれうろはれきくもはれうろはれきくもは
見山一の松の葉にきくもはれうろはれきくもは
春日の葉にきくもはれうろはれきくもはれうろはれ
梓の葉にきくもはれうろはれきくもはれうろはれ

仁和の人うろはれきくもはれうろはれきくもは

わろはれきくもはれうろはれきくもは

君うろはれきくもはれうろはれきくもは

うろはれきくもはれうろはれきくもは

うろはれ

はれきく

かきくもはれうろはれきくもはれうろはれきくもは

歌一 次

在原頼朝

ふと。たまたまぬ花もはれうろはれきくもは

寛平河内守いりうろはれきくもは

源頼朝の御

と見ればなり松のふもを春ふれいといふもあはれ
あはれとふも建てもたせられ時ふれといふ

まゐる つかさ

わがせこの衣春あつたふもあはれ松のふもあはれ
あはれやきれいといふもあはれ春ふれといふもあはれ
あはれ大寺は松のふもあはれ柳ふれといふ

僧正遍照

浅草松のふもあはれ白雲松のふもあはれ松のふも

松ふれといふ 松ふれといふ

あはれとふもあはれ春ふれといふもあはれ松のふもあはれ

あはれとふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

あはれとふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

凡河内親恒

あはれとふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

常馬坊 伴勢

春ふれといふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

松ふれといふ 松ふれといふ

折つた松のふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

あはれとふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

あはれとふもあはれ松のふもあはれ松のふもあはれ

梅を立もるもわりしわふしつちもさる
じつらたはわて

永常議源氏安長た有舟衛
東三條の左しつち
元年 嘉祥四

昔の折もて梅を折てしつちわ

歌しつち 志性法師

よにのさつちをさる梅を折るさつち折也

梅花はわて人しつちをさる

さるわ

衣たて誰ふさつち梅を折るさつち

さつちをさる

はあき

梅花はさつちをさる梅を折るさつち

月さつち梅を折るさつち

さつち 已は折

月さつち梅を折るさつち

さつち 梅を折るさつち

げつ夜のやさつち梅を折るさつち

さつち梅を折るさつち

さつち梅を折るさつち

さつち梅を折るさつち

いいてて侍れいふとていける梅を
たわていふ

人をもつて次右御花を首けりいける
水は海よりいけるをいけるいける

伊勢

春にいける梅花をいける水は神を
年以ていけるいける水はいけるいける
家はわがいけるいけるいけるいける

つめい

いけるわがいける梅花をいけるいけるいける

寛平御時きいけるいけるいけるいける

いけるいける

いけるいけるいけるいけるいけるいける

いけるいける

いけるいけるいけるいけるいけるいける

いけるいける

いけるいけるいけるいけるいけるいける

いけるいけるいけるいけるいけるいける

いけるいけるいけるいけるいけるいける

いけるいける

わ春まわすは楊花ちるよりとるる
題一す 後人——次

山たの人もすまぬ楊花いふふといそ我分やえ
又とらぬびし人すまぬおはる

山たわの人もすまぬ楊花いふふといそ我分やえ
うちのきりこのたすふたふたふた
のむばいせよふるをみてより

あきとわすたぬいすう地さ

年あけはすいおぬえうわをいふ物思
なきされおじよりらるびみてより

在原業平胡貊

世中にいて楊花をむせとまふとのけり
影——と かん人——と

いふふらなるふ楊花をむせとまふとのけり
山のけりびみてより

云性法師

又その人もすまぬ楊花てよにむせりてふ
花はもにまふみやうとより

今もせば柳さるびにばせてうき我若錦を
わするむのふてこのおわうとより

きてしる

紀のもののわ

冬より夏まで昔はうらや年あつたわい
おもしろいふしう

はあき

たまたまとてあつたつてふ震立くもいふは
奇しくもあつたつてふせうわあつたつてふ
もあつた

梅の花はけしきあひされいふわあつた
寛平御時きけいふあつたのう

とてあつた

見よあつたつてふ梅の花はけしきあひされいふ
やいふしううらやわあつたつてふ

伊勢

梅の花はけしきあひされいふわあつた
はつたつたのうわいふしううらやわあつた
人あつたつてふあつたつてふ

後人

わいあつたつてふあつたつてふ梅の花はけしきあひされいふ
あつたつてふ

業平朝臣

あつたつてふあつたつてふあつたつてふあつたつてふ
あつたつてふ

影す

人々

らねまはふれまゐるをた物ひふこそ橋のたわ
折れおけいもわづ橋をいさやもわたりて

きれわわと云

はる遠き衣ふくせめてふ花のちあひはる
さくもものしるわけりびふまゝてき
いれり人よふてなりわ計る

足けり

わづやものたふそにらる人あらあはれをあら
まの院并合の付らる

伊勢

足あふたまふ山田の橋をれがれらあひ
のちをわらう

古今和歌集卷第二

春哥下

題 次

讀人 一と

多岐なるいづくに梅たらしむにやまゝのむく
まゝといふはてしとまゝ物なむ何れ梅と思ふ所
のいさゝけらるるをききしに梅を有て世中そのけき
あふやふしに梅なり梅たらしむにいさゝけと
うけまの世にもあふに梅さうけや今にあらわ
僧いへんやうふふてををわすれ

あけのつみ

推高と徳東
母後徳純種子
若布女

梅たらしむるあけのつみとてあふやふしに
見ゆとも

雲林院よりあけのつみをわづらひて見ゆとも
見ゆとも

うつくしきし 兼均

梅らる花の所春さう雪そふつきえそに
うつくしき

さうの花のちわゆるあけのつみてうつくしき

うせいけし

花らる所のややあなまゝに梅はなすへふて
うつくしき

うつくしきとてあけのつみをよめる

うつくしき

いさゝけに梅らるあけのつみとてあふやふしに
うつくしき

うい^まわ^る人のまゝとてきゐるけつのおふ
ゝえてたよりてはうりあ

はるあき

いふは、君やると候を、今、此地にて、
山をさぐりて、いふ

吾輩もあはくすじゆをもちろむべしなみかたは
 いちやになしてまういさう時はわづ
 とてたうあそつと傳ありあはくはわづ
 極れりわづあはくわづのびてゝあはく

藤原ふくむね

[illegible]

いなりまけうびえてもち

その為也

枝もまわてふらわにをるまのちんも氷わ
ゆくのたのちわけづばふ人あふ

了

こゝろのちやわな梅の花を我はふまに
はつれおこちの物をきく人れいれま
梅はくちわれも望海えん人ふまに吹あけ

けり花のちるびとち

きれきなりわ

ふれいものけり春はよきいふ花のち

春宮のちるけりこのちむと梅の花はち

をもち ちるけりこのちむと梅の花はち

平風を花のちるけりちるけりやうらや

けり花のちるびとち

え河月々つ祢

雪やうらやうら梅はちるけり梅はちるけり

いえこのけりちるけりちるけり

つをき

山たつたつたつたつたつたつたつたつた

影 一和 大伴忠直

春はちるけり梅はちるけり梅はちるけり

春宮院言合す つをき

けり花のちるけり梅はちるけり梅はちるけり

なれり 平城天皇 大同天子

梅卿もあやふしき言にもふりて花はち

けり きけり

人祢れねけり

寛平の時といふまじき合のこゝ

藤原にきせ

ウラニ

春霞多かりとふみえつゝいれいくさの花の影かげ
 しくたつ所あるわさし誰うきや怒いかりて

新

春霞夕紅ふみえつゝいけいくさの花の紅

文

わさけい

霞立雲出をば吹く風のたけをすめ
うろたへ花をば見てもあはれ

うゑの海をへてゐる

見

花邊の市へきうわろふといふも二我
子也

卷之五

形次

人

考れ多く中巻下ふきと今巻のうろたは風を吹
吹せし下としてうろたは風を吹

千次

吹せし下さるる人よ昔は主君をいふ

曲待洽子胡

寬平處世掌傳
典傳系所別書

りつむるかにしるる物ある我輩のうねりやい

工治

子叔長 寬平必在掌傳
典傳系所別書

仁和中のおみやぎの森のあふくをまじへ

けふのふ

千カケ

藤原後蔭

藏人右少和
中納言有穗男

花のちよやひきき舌痕とるふ山は景かた

うしろすのまぐいし

さい

きれく丁ふねをいふ

又いふ

梓弓春は地川わ年月のしりあふくまわらぬ

やういふ昔のふれいけうきこえわ

けをいふ

なれいけりおさげま昔もよく物くまわ

やういふけいもよくいふいふえけり

山川わ花のさまきふいふ

あやめ

花もさる水もさるあふれいふ春もさる

春はけいふ

いふ

おめもさるさるさるさるさるさる

寛平寺町さるいふまけあふの

いふ

さるいふさるや昔いふさるさるいふ

やういふいふさるいふさるいふさる

さるいふさる

やういふ物さるさるさるさるさる

やういふさるさるさるさるさる

とちて人なつてゐる

なわいのね下

ねきつておきておつる年々地はあつてゐるわ

ま子院の年合へ春のけりてゐる

えりね

うさるや春びやまおつるなりややすんね

のちの

東今初歌集巻第三

夏哥

形一 次

讀人 一 子

わやの浪の着浪はきまわ山林をけりきさ

これあつる人けりてくさきれものへあつて

うたきよあつるけりてゐてゐる

紀一 次

あまれとてびわきなやらのやまよふけり

形一 次

かえ人 一 子

月ね山林をけりてきさ今あつたふたつ



伊勢

[illegible]

さうもつた他ならぬけ　昔人の神をす
いはのふみ月さねわりの山敷とてた
けさるたいもていある村の花橋とやと南
ふとは山びあえける町と村とのさびさて

ら

あはれ

ともはけさあふか敷きこすゑうう久今を鳴
 月々々すれもめてるきけつばきえて

をい

中、母とふゝとてけいおちのきくをなせ
 不れいふ乃神てゝとて神のきくをなせ
 いふ乃神ありとて、ふゝとてけいおちのきくをなせ

邪次

友人

五十一 ちや那をいふの物思ふはなとあまきせう
 那をいふとあまきけつわぬおのれをあらわけつ
 那をいふとあまきけつわぬおのれをあらわけつ
 思ふはなとあまきけつわぬおのれをあらわけつ
 思ふはなとあまきけつわぬおのれをあらわけつ

わが心は山林をわがてたまの、さうを林のこ
いふふ山へうふふ鳥とていふわがうふふとに
す

見ふふのすし

やまやまて山林をわがてたまの、さうを林のこ
寛平内侍のうふふふふふふ

他とまのわ

み月あふ物やいふわが、おそわうふふてわが
わがうふふ道やうふふふふふふふふふふふふ

大江山里 春風音の男

やわやわを橋をかきたくにを、おそてふふふふ

きこのつねに

あふふのふふふふふふ、おそてふふふふふふふ

ふふふふふふ

うふふふふふふふふふふ、あふふふふふふふ

他秋央一 高不見を病

あふふのふふふふふふ、あふふふふふふふ

読人

あふふのふふふふふふ、あふふふふふふふ

あふふのふふふふふふ、あふふふふふふふ

はあふふ

月面は空をさぐる勢をさびうとて
けついでくをのこもあけたるけり
うてけりきももつちよとわわけは

見はれ

郭公あまきこえ山いこけにき
山いほもきもれたにけりき
やま

はめき

郭公人ねたてたるけり我らつて
もやくす人もう所て郭公はるき
をさてしる

まろみ

びうやうもあき郭公あき
かきすのたにけりき

見はれ

郭公我らあき郭公あき
けりすのほをてしる

僧正

と地もあきこえあきあき
月のあきあきあきあき

あや

夏あはたけあきあきあきあき

やたわもともあきたのむはひまをそ
おけきばけりてあはれひそつと
しあり

足けね

らあひふても思はれまいとわあふと
ふれ月のほろもりの日あり

夏と秋とふえれりひらかきすーに風や
吹ん

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋高より

藤原敏行朝臣

秋あふちふとあやまふ秋とて風をそと秋あ

秋と日ふれをのこもあはれりてあそせ

えうけつとあふとわてより

はあき

河風あふちあつた打すう涼らもや秋

秋

えんす

わせこの衣はすまひ吹やうとつた秋のあせ

とはそわろつ時を天海よりぬきし神をいひて
やうの目より

うまわい今こし年秋はきしはしとありてわ

歌一十 読入一と

こころをまわらるは秋人きこひては秋はきこわ
おのれ秋よりいふよりきこひては秋をいひて
わきまより秋よりいひてきこひては秋をいひて
物に秋よりいひてきこひては秋をいひて
ひまわりとありて秋はきこひては秋をいひて
是は仁和二年春の母同に記す
あはれはきこひては秋をいひては秋をいひて

はきこひては秋をいひては秋をいひては秋をいひて
かゝれはきこひては秋をいひては秋をいひて
ひまわりとありて秋はきこひては秋をいひて

ひまわり

歌一十 読入一と

はきこひては秋をいひては秋をいひては秋をいひて
かゝれはきこひては秋をいひては秋をいひて
ひまわりとありて秋はきこひては秋をいひて

大正十一年

けりわびし

在原元方

あふれぬ物ともなはるけききこえはしるべが
そふりふふのあはれあひのこ

とまわり

秋風もつらう秋ききこえはるたふとまびりてき

題一

見人

わつとふれおほきこえきた人けき秋はるたふとまびりてき
いそよもさあつたう白あつたふとまびりてき
あふれぬ物ともなはるけききこえはしるべが
そふりふふのあはれあひのこ

このこいわり人けきとまびりてき人ふとま

寛平御時きこえはるたふとまびりてき

播磨菅根郡ト

秋風もつらう秋ききこえはるたふとまびりてき
あふれぬ物ともなはるけききこえはしるべが
そふりふふのあはれあひのこ

人けき

あふれぬ物ともなはるけききこえはしるべが
そふりふふのあはれあひのこ

あふれぬ

あふれぬ物ともなはるけききこえはしるべが
そふりふふのあはれあひのこ

くえん——と

奥山は紅葉ふとわけき床のふきふを林のふき

影——す

秋のふきふは山をわたりてふきふを林のふきふ
あき床とふきふをわたりてふきふを林のふきふ
ふきふをわたりてふきふを林のふきふ

有原もゆきたね下

秋のふきふは山をわたりてふきふを林のふきふ
あき床とふきふをわたりてふきふを林のふきふ
ふきふをわたりてふきふを林のふきふ

人しれ

秋のふきふは山をわたりてふきふを林のふきふ
あき床とふきふをわたりてふきふを林のふきふ
ふきふをわたりてふきふを林のふきふ

影——次

後人——と

秋のふきふは山をわたりてふきふを林のふきふ
あき床とふきふをわたりてふきふを林のふきふ
ふきふをわたりてふきふを林のふきふ

あつたはけくあつたはけくあつたはけく

秋のふきふは山をわたりてふきふを林のふきふ
あき床とふきふをわたりてふきふを林のふきふ
ふきふをわたりてふきふを林のふきふ

是貞のふきふをわたりてふきふを林のふきふ

又をわねやと

秋のふくむ白露の玉をまわつねさうさうの

題 一 休 僧ふん服

若ふくむさうの侍の女郎花我ぢあきと人あつ

僧ふん服さうさうふたふたさうさうさうさう

こふさうさうさうさうさうさうさう

あふさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさう

是負の人こふ家のさうさう

とせさうさう

秋のふくむ白露の玉をまわつねさうさうの

題 一 休 女

女郎花我ぢあきと人あつ

僧ふん服さうさうふたふたさうさうさうさう

こふさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさう

あふさうさう

秋のふくむ白露の玉をまわつねさうさうの

題 一 休 女

女郎花我ぢあきと人あつ

うさう

人は称

はるあつる唐をたふさる女をむすのふしをたふさる
女郎をたふさる女をむすのふしをたふさる

すゝめ称

人はたふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる
いはるふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる

物たるはけりふ人れあふをたふさる女をたふさる
たふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる

魚腹ま

ふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる
寛平内院人おのをたふさる女をたふさる女をたふさる

とてさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる
たふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる

たふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる
たふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる

わしゆのねま

あふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる
あふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる

はあま

やあまをたふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる
あふさる女をたふさる女をたふさる女をたふさる

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

わいらがそむきし林のふたのきけり
おと
おと
おと

古今初秋集巻第五

秋并下

おまけいゝあはれ家の交合のこゝ

文彦やまといへ

吹く秋の草本れあひるれい(山嵐とわい)といふ

草も本もまゝなれあひるれい人の作はたまたま

秋の交合いけりあはれ

絶つゝあはれ

もろもろをなほ山吹風のこゝやあはれ

あはれ

あはれ

あはれをなほあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれをなほあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれをなほあはれあはれあはれあはれあはれ

貞観の御時後醍醐殿のまゝは梅のまゝ

けりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋風の吹く日わがふらふ山に神をまつまふ神

おれはわがふらの家におかへよう

わがふらの家

うつめまふいふといふわがふらの家

まふまふ

わがふらの家をつつめまふいふわがふらの家

わがふらの家

わがふらの家

わがふらの家をつつめまふいふわがふらの家

わがふらの家

わがふらの家

わがふらの家をつつめまふいふわがふらの家

わがふらの家

わがふらの家

わがふらの家をつつめまふいふわがふらの家

わがふらの家

わがふらの家

わがふらの家

わがふらの家をつつめまふいふわがふらの家

わがふらの家

わがふらの家

おれもこれより安んずる命のこゝろ

きのこめち

あかきわて、らん兼花おきぬれりふく
寛平内き用いふふれまふのこい

大江千里

[illegible]

歩けの胡
贈佐前仙姓
元年以後

秋風のたけよりそと白重の花のねの浪はす
仙宮は菊はよけてふれいとまろふはふり
年

袁性法師

わきてはと山にたづのつちば小早晩ちをば我へ
さくのむらむ。ふて人のひなもさるゝを

5

とて

たつてふふの白牡丹袖よりそをわすれ
おきよの地よりいさくふふかばある

いも鳥に化れたの池はさふさふと
世中のけさきよは無なるわさくのを

とていふ

はるき

秋のきくやぬうさわがきくしむたわらふ

あきくたはく

んは因にけ

いあてぬやわびとるわらふ

あはれぬはあ家の文合の

ふ人

まう秋のくひいせふあうい

仁和まきのむりけつあうい

あきくたはく

平

秋のきくやぬうさわがきくしむたわらふ

人の家あけつ道たはく

あきく

あきくやわがきくしむたわらふ

あきく

あきくやわがきくしむたわらふ

あきく

あきくやわがきくしむたわらふ

あきくやわがきくしむたわらふ

形次

欠人

龍田河原葉丸て流るゝ錦中やたてき

おれあゝわろくおれ今もの世也と云ん

そと川よりちとある神といふはるのうゝ可なり

[illegible]

ふくみまのじりや吹からず

[illegible]

此をきねふらの宿よりわき道へはてふ

あふはたきとくしちをいへる人

秋月山(ちやうてつざん)のちやうてつざん

吹風の多かりしをみそつゝ秋のそをちきりて

五

我々七歳の子は、一匹綿のをいぢる。

うむかればこのけもあすまでみち

僧正適昭

又此にて他方衆をいたのびきりたり

二條の后は春宮の女を是所とせける時、所并

風は新田河上より来るべし

[illegible]

しち葉をさきてとまう人々を紅糸の道やう

なるひの都

りやあす神世々ききとたつ川唐紙氷くらう
あはれいゝあまの家のき合のこゝ

おれは、おれの家のおれ

中世の都

[illegible]

音人稱

秋をいふはるる山は秋をの綿は地きう心地こ
 まるるより人ちたじとてささむわすけり

きよはるちねとてはまわりの

五

三

夕人まきてらあつた山ふちより錦也名

秋のた

かねまち

予所に於ては神の如きに我れにの榮ふをもち
てのいふ所をも見ゆるなりといふを分

をのい所よと見ゆきや町より人らとて

之

ちのち

秋のふちねをいづまはまに我衣をいづら
す

[illegible]

けつ時ふみのたふきけるをふ

きくけのちね

神をいふに秋をまゐるに海もわが
定平跡のまゐるに定平のまゐる

寛平御内事所いふ文を奉る

菰原にきこせ

白渾は秋の葉のうらうらばわさるるやう
たゞこの河のほとりまでとらる

坂上是則

もみぢ葉のまきわさるる河の氷の枯れと誰か
あつた山こゑまでとらる

けつみちれつき

山月風のけつみちれつきはあつたやう
池のほとりまでとらる

又つ稱

風あつたもみぢ葉のまきわさるるやう

東宮院の山月風のまきわさるるやう

もみぢ葉のまきわさるる河の氷の枯れと誰か

あつた山こゑまでとらる

あつた山こゑまでとらる

又つ稱

山月風のけつみちれつきはあつたやう

あつた山こゑまでとらる

又つ稱

あつた山こゑまでとらる

かきつる日をもついでにわかれしそめ世にふたふたそ
かきつるに傳ふていせいのけわいなるれ
かきつるにやう うせいはいひ

もみちの神さまのまゝにまゐりていふに秋限もむ人
寛平殿もあきまゐりてまゐるに のうめ
られけまゐりてまゐるに のうめ
ういづるまゐりてまゐるに のうめ

かきつる

かきつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かれけつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人

かきつる

かきつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かれけつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かきつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かれけつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人

かきつる

かきつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かれけつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かきつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人
かれけつるにわかれし水もみちのまゐりて秋限もむ人